

続・ふるさと

|| 第2回 ||

給部村交差点に集まる商人

江戸時代、給部村の交差点は交通の要であった。真岡方面と烏山方面を結ぶ南北の道（現在の真岡烏山線）と鬼怒川道場宿河岸からのびる東西の道（現在の宇都宮向田線）が交わり、多くの人びとが行き交い、さまざまな物資が諸方面に輸送されていた。交差点の東部に屋敷をかまえる綱川家は、そうした物資の保管・輸送をなう問



給部交差付近絵図

屋業を営んでいた。人や物資が集まる場所には活気が生まれる。綱川家は、そうした状況をみて、文政年間（一八一八〜三〇）から幕末にかけて、交差点付近にいくつもの貸家（貸店）を建てた。幕末の給部村絵図には交差点付近に八軒の貸家が描かれている。周辺の村むらの百姓が家賃・店賃を払って、そこで新しく商売を始めていった。

店借商人の顔ぶれをみると、八百屋・紺屋・床屋・鍛冶屋・糸屋・釜屋などの屋号が確認できる。家を借りる医者もいた。安政

六年（一八五九）に店を借りた床屋直助は、月に六回、無料で綱川家家族の髪結いをするのを約束している。

糸屋鉄蔵という店借商人は、桑窪村（高根沢町）から天保一〇年代に給部村にやつてきて、明治時代に入っても商売を続けている。鉄蔵が扱った商品は、ろくそく・半紙・ちり紙・手ぬぐい・布類・桶・筆・薪炭・菜種油・茶・豆腐・白米・もぐさなど生活用品から食料品まで多種におよんだ。幕末には、給部村周辺の百姓も街道を行き交う人夫や旅人も、こうした店に入りし、ふだんの暮らしに必要なものをかたんに買えるようになっていたのである。

編集後記

□ついでの間まで埃がたつていた田んぼに水が入り、あつという間に緑一色に。連休を挟んでこの時期、マンパワーを感じるときでもありません。

□以前は「猫の手も借りたいような」という言葉がびつたりでしたが、今では自然とふれあいフレッシュする時となつているようにも思えます。自然とふれあう大切な時ですね。（K）



- 編集 芳賀町広報広聴委員会
☎028(677)6032
✉kouhou@town.haga.tochigi.jp
- 発行 芳賀町企画課
栃木県芳賀郡芳賀町大字祖母井1020番地
- 芳賀町ホームページアドレス
http://www.town.haga.tochigi.jp
- 苦情専用フリーダイヤル ☎0120(753)898



R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

